十二月総評　　立花　開

せっけんの泡
ほむほむ
と生みだして
神話のようなきみの手のひら　　さいう　石川県

「ほむほむ」という擬音が非常に可愛らしい。両の手のひらの中で包むように泡立てている姿が浮かぶ。それを見つめる主体の「きみ」への絶対的な信頼感…もはや信仰が感じられる。危うさを感じないのは、その柔らかい擬音のため。あたたかな信仰なのだ。

おはじきの小さな庭に雪の花　　花野　木春　東京都

おはじきの面積なんて、親指の腹ほどしかない。そこを庭と呼ぶものの小ささを思う。何者かはわからないが、「小さな庭」に落ちてきた大きな雪の花を黒くて小さな瞳いっぱいに映しているのだろう。

ほらこれが鍾乳洞のぬめりだと
切手の裏を舐める舌先　　常田　瑛子　山口県

ぬめりの中でも、何だかずいぶんと含まれたものの成分が複雑そうである。不潔ではないが、美しくない、暗い場所で生き延びたものから生成された「ぬめり」。しかも、それを咥内に持っているなんて。見せつけるように舌を出して切手を舐める。害意のようなものを感じてしまう。

春障子そっと開けても世界だけ　　小里京子　北海道

美しい白色の春の障子。陽を透かして、より柔らかく発光して見える障子紙の向こうを見たい。「世界だけ」というのが、その単純さこそが複雑なのであると、姿を以てして私たちに知らせてくれる。世界は大きい。どの扉を開けてもその先に必ず在るのだから。

この世からこの世を引いて残る母　　小里京子　北海道

残るというより、残された、なのだろうなと思う。作中の「母」は、主体が愛情をもって見ている対象ではなく、消費され犠牲になっていく吹き溜まりのような場所に留まるしかなかった存在。この「母」が集められる世界もあるのかもしれない。

思いきり着膨れしたらめくるめく
冬毛のあなた　あなたの冬毛　　髙田皓輔　千葉県

韻律が豊かで可愛らしい。弾むような感じがして、ふかふかに着膨れした体が歩くたびに揺れる様を髣髴とさせる。「冬毛」が主役なのか、「あなた」がそれなのか。歩くたび、揺れるたびに主役が入れ替わる賑やかさを楽しむ作品だ。

トイピアノの
ド
順番待ちの
雪　　ともよ　北海道

どのピアノもドの鍵盤を押せばドの音が出るが、音色は全く変わる。トイピアノは、グランドピアノの音色になれる日を夢見ているのだろうか。弾かれ続ければいつかそうなれると。雪がいつか降る順番がかならずやってくるように。無機物のみが登場するからこそ、哀切な空気に満ちている。

きみを想うのに提案してしまう
先生になりたいわけではないのに　　凄絶　宮崎県

待つことほど、エネルギーが必要で愛の本質を試されるものはない。愛していると言えば、それは愛になる。なってしまう。残酷な暴力が、守りたい・よかれ、という愛によってコーティングされる。けれど、それは本人には愛なのだ。違和感を抱いてはいても。

火を守る仕草で話すファンタジー　　池田　彩乃　青森県

会話の最中に両手で何かを覆うような仕草をすることはよくある。それが「火を守る」ように見えた主体。仕草によって浮かび上がってきた目に見えない火。手のひらで守られているときのみ暖かく灯る。目が良い作者だ、と感じた。

無敵だね
レモンゼリーをくずすとき　　深谷　健　埼玉県

わからないけれど、確かにそれは最強な瞬間だ。モモゼリーでもイチゴゼリーでもいけない。「レモンゼリー」でなければ。甘いだけでない涼やかな塊をくずすとき、それを口に運ぶとき無敵になれる。なんて可愛らしい存在。満面の笑みで食べているのだろう。